

与えられた命を生きる —教内新聞における「老い」の語りから—

金光教教学研究所 高橋昌之

1、はじめに

今日の講題について

- ・人はそれぞれ、日々、神様から与えられた命を生きている。
「…現身の^{うつそみ} 齢^{よわい}の長さ短きほどほどに、負いもつ務めに勤しみたましい…」
- ・現在、男女ともに80歳を超える平均寿命(男性: 80,75 歳、女性: 86,99 歳)。
- ・しかし日本人の平均寿命が50歳を超えるのは戦後。70年余で30年以上平均寿命が延びた。
- ・いま日本の高齢化率は27.7%で世界一。男女ともに80歳を超える平均寿命も世界一。
- ・これほどまでに寿命が延びた事は、医療技術の進歩や生活環境の改善などによるところが大きく、私たちは大変なおかげを受けている。いまや「人生100年時代」という時代。
- ・人は人生経験を重ねる中で、若い者には真似の出来ない物の見方や考え方を身に付ける。謂わば長老的な存在として人々から眼差される面。「教老」「宿老」。
- ・その一方で、高齢となることを余り喜んでばかりいないのがこの社会の現状。新聞やテレビでは、高齢者の介護や医療費負担の大きさに関する言説を毎日のように見聞き。
- ・高齢者ご本人からも「出来るだけ周囲に迷惑を掛けたくない」といった言葉が。
- ・「せっかく神様から命を頂いたのに、何故か申し訳ないことになっていないだろうか」。
- ・私の両親も80歳を超え徐々に心身の変調が顕著に。
- ・信心によって「老い」(加齢による心身の変調)をどのように見る事が出来るのか?
→高齢化社会に転じた1970年から今日迄の教内新聞で「老い」がどう語られたか検討
- ・「私たちはそれぞれの時代によって、人間をどのように見てきたのか」

2、高齢化社会の始まりにおける「老い」の語り

(1)「老い」への注目

- ・日本が高齢化社会となった1970年代。少しずつ高齢者へ社会的な眼差しが向けられ始めた時期。
- ・当時の『金光教徒』には、高齢化が問題とされる社会に信心の価値を表明する記事が。
- ・以下、88歳の高齢で元気に御用をする佐藤一夫師(芸備教会長)の紹介記事。

去る一月十日、本社(金光教徒社一引用者)は創立五十七年の記念日を迎えたが、記者は新春の一日、本社創立者の一人、教老 佐藤一夫師を、広島県芸備教会に訪ねた。今更記すまでもないが、昭和二十四年は、御取次成就信心生活運動が発足し、立教九十年祭が仕えられた年であり、十年後の昭和三十四年は、第二次の御取次成就信心生活運動がはじまり、また、全教待望の本部広前斎場の竣工、秋には、立教百年祭が仕えられた年であるが、教団にとって、まことに重大なこれらの時に、教監としてのご用に当たられた師である。[…]

米寿の新春を迎えられた師は、年末から、足の関節を少々煩^{ママ}っておられる以外は、とても八十八歳とは思えぬ元気で、凛としてさびのある声で、新作の和歌（別記の四首）を朗々と読み上げられた。[…]（「米寿の新春 一広島県芸備教会に佐藤一夫師を訪ねる一」『金光教徒』1970〈昭和45〉年1月21日）

- ・佐藤師は立教90年、100年の時の教監。この記事が掲載されたのは立教110年祭の翌年。
- ・当時、佐藤師は足関節の不調を抱えていたものの年齢を感じさせない様子だったとされる。
- ・大きな節目を乗り越えてきた彼が、なお元気に教会長として御用する姿を伝える記事。
→信心による生活の確かさを読者に伝える。
- ・若い頃の延長を当然とし、それを金光教の歩みに重ねる形で「老い」が取り上げられる。

(2) 信心による「老い」の克服

- ・当時は各自の信心によって「老い」の克服を呼びかけるような記事も多く見られる。
- ・そうした中、以下のような教祖の「理解」もしばしば取り上げられる。

「信心は、年が寄るほど位がつくものじゃ。信心をすれば一年一年ありがとうなってくる[…]」（理Ⅲ金理55）

「年寄りを大切にせよ。人間は自分の考えで先へ生まれてきたのではない。みな、神のおかげで生まれてきたので、早く生まれた者ほど世のために働きをたくさんしておる道理であるから、年寄りを敬うのぞ[…]」（理Ⅲ金理80）

「生きたくば神徳を積んで長生きをせよ」（理Ⅲ神訓2）

- ・これらは、①若い人と②高齢者に向けて言われる場合で、言葉の向きが逆になる傾向がある。
例：「年寄りを大切にせよ[…]」（理Ⅲ金理80）
 - ①「等しく大切にされてしかるべき」相手として高齢者に向き合いたいという、願いの言葉。
 - ②代表的な語りは、「年を取って大切にされるためには、その当人が若者から大切にされるような年寄りにならねばならない」。高齢者自身のあり方を、信心との関係で問題にする語り。
- ・この時期、これら「理解」が高齢者に向けて言われることが多い。彼らを叱咤激励するような語り。
→当人の心の持ちようで「老い」を克服出来る／克服すべき、とする風潮。
→その実例として元気な高齢教師が取り上げられ、他の高齢者にもそうあることが求められたか。
→「理解」が高齢者のあり方を開放するよりもむしろ限定しかねない状況。

3、「老い」の語りと信仰の相克

(1) 理想とされた高齢者像

- ・80年代には急激に進む高齢化に対応するべく、高齢者福祉がより広く議論される。
- ・こうした社会の動きに連動するように、『金光教徒新聞』には高齢信徒の紹介コーナーが新設。
→各自の略歴や日常生活の様子、長寿の秘訣、今後の願いなどを紹介。
→全体として、教会で信心を続けながら、家族と平穏に暮らしている高齢者像が浮かぶ。

一例として、84歳の女性信徒について在籍教会教師が執筆した記事を。

[...]現在まで病気らしい病気をしたことがない。長寿法について尋ねてみると、

「長寿法というても、神様のおかげで、今まで元気に過ごさせてもらい、神様がこの世に置いてやろうという間、生かしてもらうので、特別なことはないです」と語る。

四世代が同居しており、自分の受け持つ仕事が特別にあるわけではないが、お墓の掃除と、三坪余りの庭の草取りを自分の日課にしている。日常生活について尋ねると、「朝六時に起き、体操を三十分位して、それから家の御神前で四十分程御祈念をし、朝食を頂きます。夕方にはお墓参りをし、晩も朝と同じように御祈念をし、体操をして、休みます」 [...]

——これからのことで何かありましたら、聞かせて下さい。

「子供もおかげを頂いたことはあるのですが、私のように苦勞をしていないからでしょう、『おばあさんが死んだら信心する』と言って、今はお参りをしてくれませんが、いつも、信心せんと自分が損をするので、と言っておりますが、子供達が信心してくれることと、長患いをして迷惑をかけることがないように、と一所懸命おねがいしております。」

——有難うございました。

（「特別なことはないですが 青竹踏みがよいということで」〈私の長寿法〉『金光教徒新聞』1982（昭和57）年6月11日）

- ・この女性は月3回の月例祭を楽しみにしていた。先に夫を亡くし4世帯同居。
- ・日常生活に大きな支障は無く、介護の必要も無かった。謂わば「恵まれた」境遇にあった。
- ・家族や周囲の事を祈る姿や最後まで役に立ちたいとする願いは、紹介記事で頻繁に登場する。
- 信心を通じて人生を歩み現在は幸せに暮らす高齢者の様子は、信奉者の手本。次代へ繋げられるべき象徴的存在となっている
- この他にも高齢化を問題とする社会に向けて、信心を続ける事によって「良い年の取り方」が出来る事を伝える記事は多く見られる。

(2)「老い」についての否定的な論調

- ・ところが80年代には、以下のように「老い」の厳しさを伝える記事も見られるようになる。

平均寿命の伸びによる認知症や寝た切り増加への懸念

介護における家族の負担の大きさ

家族と同居する高齢者が抱える疎外感

- ・共通するのは、長く生きること付随しがちな事柄を否定的な側面から捉えている事。
- ・以下、ある高齢の女性信徒の投稿記事。

→長男家族と同居する中で起きている意思疎通のズレを、自分自身の非として描く。

「老い」の坂を、だんだんと登らせて頂いてまいりまして、最近よく「老いる」について考えさせて頂くことがあります。老いるとは、各自が別々に作り出す姿であり、その美醜は、内面を含めて、非常に重大になっていくと存じます。 [...]

いつも夕食後のだんらんの輪に入り、得意そうに、うれしそうに、自分の幼いころの話、

学生時代、そして戦前、戦後の話、同じようなことばかり話して五年間。みんな喜んで聞いてくれているとばかり思っていた、思慮の浅く、思いやりのなかった自分の姿が、ほうふつと浮かんでまいりました。「みんなありがとう」。まして四十も年齢の違う私の話を、いつもにこにこ聞いてくれていた嫁には、本当にお礼とともに、おわびしたい気持ちでいっぱいでした。

教主様にはご神勳下され、教会では、先生からありがたい教えを頂き、信心友達からは親しく話かけて頂き、家族からは朝に夕にいたわりの情をかけてもらっています。この恩恵に甘えることなく、何か一つでもいい、人のお役に使って頂かねば申しわけない、と念願させて頂いています。（「敬老の日に寄せて」『金光新聞』1987〈昭和62〉年9月13日）

- ・この女性は、夕食の団欒時にしばしば昔の体験を皆に話していた。
- ・しかしそれが長男の嫁に疎まれていた事を知ってショックを受ける。
- ・高齢者が昔の話を繰り返すのは当たり前。若者とのすれ違いが起きるのもよくある事。
→ところが彼女はすれ違いの原因を自身の「老い」に求め、それを「醜さ」として価値づけている。
→嫁に「お礼とおわび」を表明している通り、自身の信心の至らなさとして受けとめている。
- ・彼女に抱えられた「老い」が本教の信心を表明する語りとして方向付けられ、発表されている。
→「理想的な高齢者像」が教内に共有され、高齢者自身がそのギャップを埋めるような努力を自らに課していたのかも知れない。
- ・年を重ねれば心身共に老いていく事は当たり前。
→「老い」に抗う事が信心の価値だとすれば、安心して人前に出たり教会に参拝することも難しい。
→そのことを私たち自身が、信心という名のもとに行いかねない危うさが浮かぶ。

4、社会に向けた信仰確認の行方と見出された人間観

(1) 問いに付された信仰

- ・90年代には介護労働を社会全体で担う「社会化」が一層図られた。
- ・同時期の『金光新聞』では、「高齢化社会と金光教」をテーマに特集記事が連載された(全10回)。
→「生きがいと宗教」「痴呆症」「高齢者の性と寝た切り」などのテーマ。
→本教がどう対応出来るのかを検討する挑戦的な取り組み。
- ・結果的には、上記のような問題に対して本教なりの対策を示すということにはなかった。
→事柄を持つ重さや複雑さに触れる中で、必ずしも当初の目論見通りには進まなかったか。
→社会における宗教の意義そのものを問いに付す論調も見られる。
- ・しかし何かの対策を講じる対象として「老い」を語る教内の風潮に問いを投げかけた。
→「老い」が人間や信仰に与える意味を、読者に考えさせる可能性を持ったのではないか。

(2) 照らし返される人間観

- ・社会の高齢化が進むに伴い、90年代から2000年代にかけて介護体験を元にした記事が急増。

→介護に「神様から頂いた御用」としての意味を見出していくような語りが見られる。

・福祉施設の職員やホームヘルパー等の職業に就いている信徒らの声も多く紙面に載る。

→施設に勤務しながら感じた事を通じて高齢者への見方を考えさせるものも。

→以下、25歳の「痴呆療法士」である信徒が投稿した記事。

[...]私は、痴呆療法士として痴呆のリハビリを担当しています。その内容は、排泄、食事、衣類の着脱などの日常生活動作訓練、民謡教室、楽団演奏などの音楽療法、和室での習字、ぬり絵、パズル、糸つむぎ、読経などさまざまです。[...]痴呆のリハビリにとって何が一番大切か。それは老人に明るく楽しく幸せな気持ちになっていただくこと、また、必要とされ、ここにいてもいいのだという安心感を与えてあげることです。時として痴呆老人は、人間として扱われない事があります。私は、痴呆老人の人間としての尊厳を守り、実意丁寧に接していきたいと思います。[...]（「温かい笑顔」に喜び）（「チャレンジ青春 がんばってます」『金光新聞』1990〈平成2〉年7月22日）

・筆者は、病院で日々、認知症高齢者の生活に必要な訓練を行う。

・その中で認知症の高齢者が「人間扱い」されない事もあった。

→筆者自身、恐らくそうした感情が頭をもたげるからこそ、「実意丁寧」でありたいと願ったか。

・注目したいのは、この筆者が本人も意図しないままに「人間とは何か」を問われている事。

・私たちは自分の意思を持って主体的に生活する事を当然だとし、そこに「人間」の基準を置きがち。

→その基準を高齢者にも当てはめて、若い頃のように元気であるべきだとみなす。

→教祖の「理解」もそのように語る場合があった。

・若い頃に当然とした事が変化する過程が「老い」。

→様々に身に付けたものを取り払った「人間」の姿を見せている。

→神様から頂いた寿命を全うする中で現れた姿をあたかも「問題」として語るならば、問われるべきは私たちや社会の価値観の方ではないか。

おわりにかえて

・冒頭に、高齢者の「出来るだけ周囲に迷惑を掛けたくない」という声を紹介した。

→むしろ年を取ってから周囲に自身を委ねて行くことは、お互いにとって大切な御用かも知れない。

→「信心は、年が寄る程位がつくものじゃ」との「理解」も、そうした心の動きから捉え返せるように思う。